

# 修養の季節

漱石とその時代・異聞

1976年版の『漱石全集』索引には拾われておらず、99年版になって増補された項目のひとつに「修養」がある。高橋英夫氏などは、旧索引をもとに漱石の「教養」を論じたが、実は「修養」という言葉は、漱石全集を通じて二度しかあらわれない。むしろ漱石の時代の鍵言葉は「修養」であった。この言葉の社会的通用環境を再構築することから、漱石文学を読み直そう——それが、中国、首都師範大学の王成助教授（国際日本文化研究センター客員）の試みである。

「修養」という言葉の漢文世界の語源穿鑿はともかく、近代日本にあっては加藤岫堂の『修養論』（明治42年）というベストセラーに、cultureあるいはBildungの訳語として説明されているのが見える。つづく新渡戸稲造の『修養』（明治44年）にも「修養とは修身養心」との定義が、中国語の語彙に沿って示されている。本書は第一高等学校教授、帝国大学教授の著者が、通俗とも見なされた『実業之日本』誌上に連載し、反響を呼んだ書物。時代はあたかも日露戦争直後、おりから巷では、一灯園をはじめとして、さまざまな「修養団」が宗教団体の閉鎖性の傍らで、急速に拡大を遂げる時代だった。鈴木大拙や西田幾多郎らが参禅を始めるのも、あい前後する時期のこと。世はさながら修養ブームにあったと言って過言ではない。

そんな中で執筆された短編に『野分』（明治39年起稿、翌年1月『ホトギス』に掲載）がある。そこには修養講演を行う弁士が登場して、小説のなかで一場の実演がいわば「実況中継」されるのだが、その席上で「二十秒程絶句して待っている」道也先生（名前からして、修養臭い）、王成氏の指摘によれば、「現今一流の批評家」と漱石の揶揄した大町桂月の「至極訥弁で一言いっては二三分休み」という演説風景（『現代文士の演説振り』博文館、明治41年）を彷彿とさせる声帯模写となっている。『虞美人草』（明治40年3月29日『東京朝日新聞』連載最終回）の末尾でも、自殺した藤尾を巡って、漱石は「甲野さん」に、「人生の第一義は道義なり」といった、いかにも修養っぽい手紙を綴らせ、それを「倫敦【ロンドン】の宗近君」に送り、宗近君に「此処では喜劇ばかり流行る」と答えさせる場面、小説を終えて見せる。このあたりにも、最近日本で流行を見せた「修養」に対する、帰朝者漱石の皮肉な距離意識が窺えよう。

さて、修養書を世に広げた著者たちは、王成氏の調査によれば、仏教界では最近再評価のすすむ清沢満之ほか、南条文雄、釈宗演（鈴木や西田のみならず漱石も参禅に参加）、キリスト教界では、『武士道』の新渡戸稲造や植村正久、海老名弾正、教育界では沢柳政太郎、嘉納治五郎から下田歌子といった広がりを見せる。近代「柔道」も女子教育も、まさに「修養」に便乗して時流に乗った。また、学界ならば井上哲次郎、姉崎正治らが片棒を担ぐ「修養」は、実業界では渋沢栄一の成功譚に格好の舞台を提供する。当然文学者も同様の時代風潮に浸っていたが、その多くが明治初年後に生まれた、明治維新第一世代だったことは注目に値する。なかでも内村や新渡戸のみならず嘉納治五郎などは、英語による教育を受けた「英語名人世代」（太田雄三）であり、学制の都合からわずかに遅延した漱石には、感情的な屈曲もあった。そのかれらが四〇代を迎えたころ、日露戦争を辛くも凌いで「一等国」の自負ももち始めた極東の立憲君主国では、場合によっては「教育勅語」への違和感の表明（植村正久）といった、さまざまな利害を秘めながら、既存の道徳体系を横断して、「修養」という社会現象が浮上した。

その受け手の中心となったのは、おりから師範学校などの拡充によって入学を始めた、一八九〇年代生まれの師弟たち。その彼らに兄貴風を吹かせたのが、八〇年代生まれの『白樺』同人とその同世代。阿部次郎、安倍能成、小宮豊隆など、いわゆる漱石のお弟子たちがその典型で、かれらは続いて岩波の哲学講座を執筆し、「大正教養主義」の下地を作る（ただしこの呼称はむしろ戦後の発案で、当時はリッケルトなど西南ドイツ派、新カント派の文化主義を受けて、文化住宅、文化鍋など、「文化」が支配的用語だった）。世代論の危険は承知したうえで、この図式は、例えば阿部の『三太郎の日記』の圧倒的な人気を理解する際の補助線とはなるだろう。明治が文明の時代であり、震災以降が文化の時代となるなら、その狭間には、さながら時代の褶曲を鱗状態に横滑りするようにして、修養の季節が貫入していた——王成氏のこの仮説は、戦前期日本の知性史の基層の生態を探り直すうえで、有効な座標軸を提供してくれることだろう。この中国の俊英による、充実した研究書の上梓が待ち遠しい。

2647  
図書  
35710  
2003  
9.  
27

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学助教 稲賀繁美